

「俺さ、社会人になって三年経ったでしょ？ 仕事の自信も付いてきたし。収入も少しずつ増えて、すごい贅沢は出来ないかもしれないけど一緒に暮らせして行ける分はあると思う。だから、良かったら……つまりその……。僕と、け、結婚してください！」

「藍斗……♡」

その日、私は付き合って五年になる藍斗にプロポーズされた。

黒縁眼鏡から覗く優しい瞳で私を見つめながら、指輪の入った箱を手渡される。私はそれを優しく受け取って最高の笑顔を見せた。

「ありがとう、ありがとう藍斗。どうかこれからも、よろしくお願いします♡」
そう言っただけで私は彼のプロポーズを受けた。そのままぎゅ、と抱きしめてOKの返事をする。

藍斗の部屋でいつも通りのお家デートをした後のプロポーズ、っていうのもなんだか彼らしくていいなと私は思った。

彼、本間藍斗（ほんまあいと）は元は同じサークルの友達だった。一年かけて

自然と仲良くなつて、向こうの告白がきっかけで付き合い始めた。なんともオーソドックスな馴れ初めだと思う。

真面目で物腰も柔らかで「趣味は料理」と言う藍斗は付き合い合ってから本当に私の事を大事にしてくれた。それは社会人になってからも変わらない。懸命に働く彼は職場でも順当に評価されていた。将来有望、結婚相手として何の不満もない男性だ。

でも……。

「ど、どう？♡ これ、気持ちいい？♡」

「んっ……♡ うん、気持ちいいよ♡」

プロポーズ後、気分が盛り上がった私たちはそのまま彼の部屋で裸で抱き合っていた。

藍斗の家は一軒家で、今この家にいるのは藍斗と弟の玲斗（れいと）君だけ。両親は仕事の都合で海外に行ってしまった為、この大きめの一軒家に兄弟だけで住んでいる。

弟の玲斗君は今も家にいるけど、彼の部屋は一階だ。私たちがいる二階の部屋の物音は殆ど聞こえないだろう。

（でも、まあ……部屋が隣でも私たちのセックスがバレることはないかなあ）
私はちよつと冷めた心情でそう思った。

「はあ♡ はあ……♡ い、入れてもいい？」

「う、うん……いいよ♡」

私の返答に安心した顔で、藍斗はコンドームを丁寧につけていく。

（もう、入れちゃうんだ……）

そんな私の想いを知らない藍斗は、息を荒げながら私を抱きしめる。そのままゆっくりペニスを中に埋め込んでから、優しくキスをした。

「う、んっ……♡ はあ、はあ……っ♡」

埋め込まれたペニスが優しく律動を始め、私の中を刺激していく。藍斗はいつも私の身体を気遣って無茶な事はしない。

優しい抱き方をする所も、とても藍斗らしくて私は好きだった。

（あ、中……っ♡　そこ、もうちよつと奥っ……♡　あ、あっ♡　もつと来て、
藍斗おっ……♡）

——ずぶ♡　ずぶ♡　ずぶ♡　ずぶ♡

「あっ……中、すっごい、きもちいいっ……♡」

「うん、私もっ……きもちいいよっ♡　藍斗っ……♡」

「ううっ、だめだっ……イクっ♡」

「や、待ってっ……もうちよつとっ♡　もうちよつとだけっ♡　あっ……あっ♡」

私は縫るような声を出して藍斗の腕にしがみ付いたが、直後にビクンと筋肉質な身体が硬直して快感に震えた。

そのまま何度か痙攣し、精を吐き出した肉体が脱力して私に覆いかぶさって来た。

「はあ、はあ♡　ごめん……すぐ出ちゃった……」

「あ、ううん。いいよ、気にしないで。気持ち良かった？」

「うん、凄く……♡」

「なら良かった♡」

そう言っ、私は藍斗にキスした。それから少し会話しているうちに藍斗の返答にまどろみが混じって、やがて静かな寢息が聞こえてきた。

私はその寝顔を見ながら考える。

（私は……この人が好き。優しくて、私を大事にしてくれて、真面目で……。藍斗が気持ち良くなってくれるセックスも、本当に大好き。この気持ちは嘘じゃないよ。結婚したら私、絶対幸せになれるんだろうなって思う……）

藍斗はいつも私の事を一番に考えてくれる。だからきつと、セックスも私の負担を考えて優しくしてくれるのだろう。とても彼らしい行為だと思う。

（それなのに、私は「自分の欲」を持て余して……。これは私の贅沢な悩みなんだろうな……）

私は寝静まった藍斗に背を向けて、自分のスマホを取った。

そしていつもの検索ワードを入れて、お気に入りのページを開く。

「……っ♡ん……♡」

そのまま私は自分の股間に右手を伸ばして、気持ちいいポイントを擦り始めた。
(ここ、もっと藍斗に触って欲しいな……本当は、もっといっぱい……♡ やらしいことしたい♡ んん……っ♡)

スマホには足をM字に開いた豊満な肉体の女優さんが映っている。

その股の中心を、モザイク越しにでも逞しいと解るペニスが何度も擦りつけられていた。そのままゆっくりペニスが女優さんの中に埋め込まれて、期待感に腫を潤ませた女優さんの表情が歪んでのけぞっていく。

ずぷぷぷ……♡と、奥まで埋め込まれた巨根がいやらしい愛液にまみれていった。

そこに別の男優さんの手が伸びてきて、女優さんのクリトリスを激しく上下に擦りはじめる。

(ああ……やらしい♡ すごい気持ちよさそうな顔♡ 消音にしても解る……きつとこの人、すっごくいやらしい声出しちゃってるんだ♡ 部屋中に響いちやうぐらいのヤラシイ声……♡)

興奮した私は、自分のクリトリスを擦るスピードを上げた。ふーっ、と藍斗を起こさないよう静かに息を吐いてから下半身の快感に夢中になる。

スマホの中では、男優さんが巨根をぱちゅん♡ぱちゅん♡と激しく女優さんに打ち付け始めていた。がっしりした肉体が力強くおまんこをえぐって長時間責め立てる。女優さんのクリトリスを責めていたもう一人の男優さんは、いつの間にか電マを取り出して容赦なく陰部へ当て始めた。

（ああっ、激しいっ♡ ……こんなのされたら、私、どうなっちゃうんだろう♡ 大きなおちんちんで突かれながら電マ責め♡ されてみたいっ♡ 藍斗にこんな事されてみたいよぉ♡）

——クリクリッ♡ クリクリッ♡

欲望に支配された脳内が、自慰の指使いを激しくさせる。その刺激で興奮した陰核がツンっ♡と上向いて、熱を持ち始めていた。

女優さんが何度も身体を痙攣させて絶頂すると、ガクガクと膝を震わせながら泣きそうな顔のままお潮をまき散らした。男優さんは追い打ちをかけるように、

イキ終わっていないおまんこにペニスを激しく打ち付ける。

（したいっ……したいよおっ♡ 本当は私……もっとやらしい事したいっ♡ 私が声我慢できなくなっちゃうぐらい、激しいえっちしてみたい♡ イキ声漏れちゃって弟の玲斗くん「えっちしてたっでしょ」って……バレちゃうぐらい、何時間も激しいセックス……♡ ああっ、私も……♡ だ、だめ、想像したらっ……イクっ、イクううっ♡♡）

「……っっ！♡♡」

僅かに腰を浮かせて、私は声を殺したままクリイキしてしまった。
クリトリスの快感が全身に巡って、じわっと汗をかく。

「はあ……はあ……♡」

私は息を整えながら、そっと横目で隣の背中を見た。

藍斗の肉体は先ほどと何も変わらず、規則的な寝息を立てている。

「……」

その見慣れた広い背中に罪悪感を感じつつ、私もそっと目を閉じた。

凄く正直に言うとは私は唯一、藍斗とのセックスだけが不満だった。だから時々、こうして藍斗との行為後に満たされなかった肉体を自分で慰めていた。

それでも彼の事が大好きな事には変わりはない。

藍斗に嫌われないためにも、幸せな結婚生活を送るためにも、こんな欲望はずっと黙っているつもりだ。

えっちな動画を見ているときに考えたことは、あくまで妄想。

私が心から願うのは藍斗との幸せな時間がずっと続く事だから、その為に私が少し我慢することなんて全然苦ではない。

……そう、思っていたはずなのに。

「ねえ。ちよつといい？」

「えっ……？」

急に後ろから声をかけられて、私は目を丸くして振り返った。

そこに立っていたのは藍斗の弟、玲斗君だった。

今日は藍斗の家で、私と玲斗君の三人で夕飯を食べる予定になっていた。今後、家族になる玲斗君と本格的に交流を深める為、一緒にご飯を食べようという藍斗からの提案だった。

藍斗からのプロポーズを受けたことを玲斗くんに話したらとても喜んでくれたらしい。「じゃあ俺、彼女さんの事は『お義姉さん』って呼ばないとね」と玲斗が言っていたよ、と彼が照れ笑いしながら教えてくれて私まで嬉しくなってしまうた。

夕方四時。私と藍斗で下ごしらえをしていたら、足りない食材がいくつかある事に気付いた彼は近くのスーパーに買い出しに行っていた。私はその間に今ある材料だけでも切っておこうと、キッチンに立っていた。

そこで玲斗君に声をかけられたのだ。予想外の出来事に私は少し戸惑った。

（何の話だろう……。まさか二人きりの時に話しかけられると思わなかったな）

私は目の前の玲斗君を見つめた。

玲斗君は藍斗の二歳下の弟で、兄の優しい気な雰囲気と違ってどこか鋭いオーラを放っていた。真面目に厳しく育てられた長男と違って、次男はある程度自由にさせてもらっていた、と前に藍斗が言っていたのを思い出す。

その話通り、玲斗君は髪を明るめの色に染めてピアスをつけている。一見チャラそうに見えるけど、私と会った時に「こんちは」と挨拶はしてくるので悪い子ではないかな？と思っていた。

それでも今まで、二人つきりで会話をしたことはなかったので私は少しぎこちなくなってしまう。

「わ、私に何か用かな？ あ、今ね、藍斗が夕飯の買い出しに行ってるから、夕飯にはもう少しかかると思うんだけど……」

私が当たり障りない話を口にする、玲斗君は目を細めて笑った。

それは愛想笑いではない、加虐性を含めた笑顔だった。

(な、なに……?)

私の背中にぞくりと嫌な感覚が走る。けれど玲斗君は私の反応を気にもせず口を開いた。

「そう。やっぱり今、兄貴いないんだ。玄関閉まる音がしたからそうかな」とは思ってたけど。ふーん……?」

そう言いながら玲斗君は私の事をじろじろと見た。頭から足の先まで値踏みしているみたいに凝視するので、どうしていいかわからなくなってしまう。

「玲斗、くん……?」

戸惑いながら名前を呼ぶと、目が合った。そこには捕食者のような鋭さがあった。

「これ、な〜んだ?」

「えっ? ……っ! あ……!!」

玲斗君が私に見せてきたスマホ。その動画を見た瞬間、私の血の気がサアッと引いていく。

そこには足をM字に開いた豊満な肉体の女優さんが映っていた。それは明らかに私が前にお泊りしたとき、藍斗の部屋で見た動画だった。

「前回、うちに泊まりに来た日の二十三時十三分に、これ、見てたよね？」

「なっ、なんでっ？ 私のスマホ!? そんな訳……」

パニックになった私は玲斗君が差し出したスマホを奪った。けれどそれは私のスマホではなかった。これは玲斗君のものだ。

（どうして!? 玲斗君のスマホでこの動画が再生してあるの？ 私がこれ見てたの、バレてる……？ なんで、なんでっ……）

顔が赤くしつつかおかしな汗をかきながら、私は「なんで？」と脳内で繰り返した。

恐る恐る見た玲斗君の顔は、凄くいやらしい顔に歪んでいた。

「あっはは、解りやすいリアクション♡ あかねえ、もう少しセキュリティ管理しつかりしなきゃダメだよ、お・義・姉・さ・ん♪」

「え……あ……」

プロポーズされて、結婚が決まって、彼の弟に「お義姉さん」と呼ばれる。

本来嬉しいはずの言葉が、今の私には全く平常心で聞く事が出来なかった。玲斗君はそんな私の事を気にせず、スマホを取り返して話を続けた。

「半年ぐらい前、うちに来た時……兄貴のパソコンで自分のグロームアカウントにログインしたでしょ？ それ、同期オンのままそのままにしてたよね？ 俺、こう見えてもパソコン関係の仕事してるからさー。その辺疎い兄貴のパソコンも俺がメンテナンスしてるんだよね。それで、お義姉さんがスマホで見た履歴、こっちのブラウザに残ってるの見つけちゃって。……これ、意味解る？ 同期したままだとね、検索ワードも、見たサイトのタイトルも、何時何分にアクセスしたかまで、全部俺のパソコンに履歴が残っちゃうんだよ。つまりさ……」

「やつ……！」

不意に玲斗君が私を強く抱きしめてきた。そして耳元に唇が触れそうぐらい顔を近づけて、囁いてきた。

「この半年間、お義姉さんが夜中にこっそり何を見てたか、ゼーんぶ俺に筒抜け

だったってこと♡」

「……!!」

私は心臓が飛び出そうなくらい、羞恥心からの動悸が止まらなかった。過去に自分のスマホで見てしまった卑猥なサイトを思い出して、言い訳の言葉も見つからずに口をパクパクすることしか出来ない。

そんな私に追い打ちを掛けるように玲斗君は言った。

『クリトリス愛撫日記』、『クリ責めハーレム動画まとめ』、『クリイキ中毒のクリ奴隷育成所』……この辺のサイトが特にお気に入りみたいだね♡ それから『犯され堕ちる夜の記録』、『秘密の強制絶頂動画』も時々見てるでしょ♡ それからあ……」

「……っ、あ……あ……」

私は玲斗君にがっしり抱きしめ固定されたまま、自分が普段見ているお気に入りおかずサイトを耳元で流し込まれ、もうどうしていいか解らなくなってしまった。

誰にも知られたくない自分のストレートな欲望部分を、よりによって婚約者の弟に全てバレてしまっていたなんて。

羞恥心が限界を超えた私は、固まったまま何もできなくなってしまう。

「あ、それと先月に寝取られものも見てたでしょ？ 夫の兄弟に犯されちゃうってやつ♡ もしかしてお義姉さん、俺にそういう事されたいって願望があったり……？」

「ち、違うっ！」

玲斗君のその言葉に私ははっとして、咄嗟に否定の言葉を口にしていた。

「そ、そのサイトは、たまたまリンクで出てきて見ちゃっただけで！ わたし、べ、べつに、れいとくんとそういう事したいわけじゃ……」

「へえー、そう？ じゃあ、つまり……クリ責め動画を好きで見てたのは間違いないんだね？」

「……っ!!」

完全に墓穴を掘ってしまった。そう気付いて私は再び何も言えなくなってしまう

う。

色々な事に完全にパニックになってしまった私は、玲斗君に腰や臀部を撫でられてゐる事を現実として認識できないでいた。

ただ火が出そうなら熱くなつた頬を、両手で抑えて半泣きになることしか出来ない。

「別にさ、女の人があんな動画見ても、俺はなーんにも変だなんて思つてないよ？ 女の人だって性欲は発散したいもんねえ。……たださ。お義姉さんがヤラシイ動画見てる時間帯って、兄貴の部屋にお泊りしてる時が多いんだよねえ。なんでかなあ？ ふふ、これは俺の想像なんだけどさ、もしかしてお義姉さん……」

私より十センチ以上背が高い玲斗君は、下を向いていた私の顎をそつと掴んだ。そのままぐいっと持ち上げて無理やり目線が合う格好で、言い訳でない事実を指摘される。

「兄貴とのセックスが物足りなくて、兄貴寝た後にオナニーしてる？」

「……!!」

誤魔化せないほど、動揺した顔を全部見られてしまい私は震えた。

「あははっ、解りやすっ、顔にゼーンぶ書いてある♡ 『私は藍斗とのセックスじゃ満足出来なくて、お気に入りクリ責め動画見てこっそりオナニーしてました』……って顔だぁ♡ 耳まで真っ赤じゃん、かわいい♡」

「やだ、もお……やめてえ……。う、うう……」

限界を超えた羞恥心が私の感情をせり上がらせる。情けなくも涙目になって、震えた唇がプルプルと揺れ続けていた。

「やば、その顔。めっちゃうくちやゾクゾクする……。♡ そんなんされたら、俺……♡」

「えっ、あ……あっ!?♡」

玲斗君は意地悪な笑みを浮かべながら、私の腰を撫でていた掌を太ももの方に滑らせてきた。そのままスカートの中に侵入し、下着越しに触れられて肩がビクリと震える。

「な、なに……なにしてっ……」

「ふふ、怯える顔もいいね♡ 虐めたくなっちゃうなあ……。ほら、ここが切なかったんでしょ？♡ お義姉さんのクリトリス♡ 兄貴のセックスって、めっちゃくちゃ普通っぽいもんねえ」

「うそっ……。や、やだ。やだっ……」

私はキッチンの隅に迫いやられて逃げ場を失っていた。その状態で下着の上から敏感な部分を優しく擦られて、私はますますパニックになってしまう。

それでも藍斗との婚約を思い出した私は、首を横に振って「やめて」と否定の意志を示す。

「わ、私があっちなサイト見てたのは謝るから。だからもう、これ以上変な事しないでっ……。お願い。こんなのだめっ……」

涙目になって必死にそう言った私の言葉を、玲斗君はキョトンとした顔で聞いていた。数秒何かを考えていたけど、再び何事もなかったかのように私の股間をまさぐってくる。

——スリ♡ スリ♡ スリ♡ スリ♡

「やつ……やだっ。れいとくんっ……」

「ん、何か勘違いしてるみたいだけどさ。俺は別に謝って欲しい訳じゃないんだ。どっちかっていうと、セックス後にオナニーさせちゃってる兄貴が悪いよねゝって思ってるよ？」

「そ、そんなこと……。やつ……ん♡」

「だからさ、俺が……その足りなかった分、代わりにしてあげるって事♡ 解る？」

「そ、そこだめっ、擦らないでっ♡ こんな……だめ、浮気になっちゃうからあっ♡」

玲斗君は話しながら私のクリトリスを的確に捉え、人差し指で上下に擦りつけていた。私は内股になってその手から逃れようとするけど、じわりと与えられた快感で身体が上手く動かない。

「……浮気？」

——クリンッ♡ クリ♡ クリ♡ クリ♡ クリ♡

「あ、あっ……♡ やあっ……♡」

玲斗君は指の腹で、熱くなってきた突起をゆっくり撫でてきた。円を描くような動きはいつもの私のオナニーの触り方と似ていて、どうしようもなく気持ち良くなってしまう。

否定できない快感の中、混乱する私に玲斗君は悪魔の囁きをしてきた。

「あのねえお義姉さん、浮気っていうのはあ……兄貴以外のチンポがお義姉さんのおまんこに入ることと言うの。ちよつとクリ弄られたぐらいじゃ、浮気にはならないんだよ？」

「な、なに言ってる……んうううっ♡」

私は玲斗君の言った言葉の意味がすぐには理解できなかった。

だって、そんな訳はない。これはしてはいけない事だ。

ただ、ただあまりに自信満々に言うので、一瞬私のこの感覚が間違えているのかと錯覚してしまった。

私は必死に正気を保とうと、頭を振って言い返した。

「とにかくダメっ……♡ もう、これ以上は……」

「もー、真面目だなあ♡ だからあ、こうやって……かるーく爪立ててえ、スリーって♡ パンツの上からぽってりクリちゃん刺激するのは浮気にならないんだってば♡ ほら、これイイでしょ？ ゆっくり往復してあげるね♡ スリスリーって♡」

「あっ、あっ……♡ はああんっ♡」

私はクリトリスの刺激でどんどん思考がぼーっとしていくのを感じていた。玲斗君の言っていることはめちゃくちゃな話だ。それは理解している。

けれど長年、憧れてしまっていたこの卑猥な行為はとても甘美なものに思えてしまった。

（だめなのに、本当はこんなのだめなのに……♡ 少しだけそうなのかなって思っちゃってる。私っ……これぐらいなら、これぐらいならいいのかな、って。藍斗にしてももらえない事、ちよっとだけ、ちよっとだけなら……？）

膨らみ始めたクリトリスの快感はどんどん私の脳内の思考を低下させ、都合のいい理論を受け入れ始めてしまう。

「ふふ、いいね♡ 俺、そういう欲望に素直な子好きだよ♡ ね？ 大丈夫……弟の俺が、兄貴じゃ満足できないクリトリスのお世話してあげるから♡ クリトリスだけ♡ それならいいでしょ？ ほら、スカート持って、触りやすくして♡」

私の思考を読んだ玲斗君が、最後のダメ押しとばかりに私にこの行為を手伝わせる。焦点が定まらなくなっていた私は言いなりになって、スカートの裾を掴んでしまった。

「はあ、はあ♡ はあ、はあ♡」

「ねえ、自分で解ってる？ すっごい物欲しそうな顔してるよ？♡ 可哀そうにねえ、そんなに切なかったんだね……このクリトリス♡ えっちな動画見て憧れてたドスケベク責め、いーっぱいしてあげるね？♡ すぐに直接なんて触らないよ？ まずは下着の上から、しつこいぐらい触って焦らしてあげる♡ すごい

う事、したかったんでしょ？♡」

——クリ♡ クリ♡ クリ♡ クリ♡

「うん、あっ♡ ……んん、んふ♡」

私は玲斗くんの言葉を否定も肯定もできなかった。けれど無意識のうちに自ら腰を突き出して、触りやすい態勢になってしまう。

（や、やだっ……わたし、こんな……♡ スカート自分で持つて腰つき出して……触って欲しくて仕方ないみたいじゃない。こんなのため、だめなのにつ……♡ やああっ、玲斗くんのクリ触り、優しい刺激で気持ちいいよおお♡）

玲斗くんは明確に膨らみ始めたクリトリスの形を確かめるようになぞってきた。ツンつと尖った頂点をスリスリ♡と撫でてから、側面を擦って、勃起を煽るように下側から持ち上げてくる。

「最初に触った時より、解りやすく固くなってきてるよ……お義姉さんのクリトリス♡ 肩で息してすごい興奮してるね♡ いいね、いっぱい可愛がって育ててあげなくなっちゃうな♡ もう少し勃起させてあげようね♡」